第2部 さあ、片づけに困った!ときの虎の巻

時間を暮らしに保存する

～空き家から出たモノのリメイク・リペア奮闘記～

（有）ひのでやエコライフ研究所
研究員・ワークショップデザイナー 大関（おおぜき） はるか

写真１　私たちの現在の住まい

1 隣の空き家と工場が売りに出る

2017年の春、今の家に引っ越しました。約10年間、空き家だったところで、京都市内にある元繊維洗い工場の母屋にあたります（写真1）。

それまで住んでいた家の隣の家だったので、同居人たちとひやかし半分で、その前の初秋に内覧に行きました。第一印象は、「ここには住みたくない」でした。元の持ち主の方が倒れられたその日のまま時が止まった家は、整頓こそされていましたが、ものすごい量のモノと、ひどいカビと埃でした。あまりの汚さに、同居人の2歳の子どもを抱えて、内覧を済ませたその足で風呂に入りました。

同居人というのは、私と夫が現在一緒に暮らしている12名ほどの仲間のうちの一家族のことです。3.11の震災後に京都にやってきた人たちと数家族で暮らしています。といっても、みんなそれぞれの玄関があり、それぞれの台所がありますので、同居というには語弊があるかもしれません。私自身は大学に入学して以来20年、環境問題を理由にほとんど常に共同生活を送ってきています。一人一台の冷蔵庫や洗濯機は不要だという考えからです。そしてなにより経済的で楽しく、豊かで便利な暮らしだからやめられないというのが正直なところです。共同生活の話はまた別の機会に譲って、家の話に戻します。

その後、その同居人がその家を購入したことは驚きでした。同居人は2016年12月19日より1週間、ひたすら家の中の荷物を外の工場スペースに出す作業をしていました。業者に頼んだら97万円の見積もりだった屋内のモノの運び出し作業です。

「隣の家でえらいことが始まった」と見ていました（写真２）。

写真２　家の中の荷物を外の工場スペースに全部出したところ
Photo by Yuya Miki

2 手を動かせばモノは生き返る

しかし、業者でも大変な作業を全部自分たちでやってしまった彼らに感化され、何か私にもできることはないかと考えはじめました。全部ごみにしか思えなかったモノの中にはまだ使えるモノもあります。「きれいな座布団と布団はごみに出さずにすべて打ち直しに出した」というので「そのカバーを作って生き返らせよう！」と生地を買いに行きました（写真3、4）。

写真３　打ち直されて返ってきた座布団20枚は綺麗でふかふか。「本当に捨てなくてよかった」といいあった

写真４　カラフルな生地でカバーを作った。イベント開催や来客の度に大活躍

他にも、銀行やお店の営業グッズのタオルや手ぬぐいが未開封のまま500本近く出てきたので、それを開けて包装ごみとタオルに分別する作業を手伝ったり、まだまだ使える食器をきれいにして使ってもらえる人を探したり、できる範囲の協力を皆でしました（写真5）。

写真５　同居人の一人がみかん箱15箱分の食器を洗って磨いて並べたところ

3 10年の空き家のリペア

2月5日、突然の展開ですが、私と夫はこの家へ引っ越すことに決めました。

そこから2か月間、同居人や多くの友人たちと不慣れな大工仕事やDIY作業をしてわかったことは「木造の家は、生き返る」ということです。他の家の経験がないのでわかりませんが、築70年の木造住宅は、私が内覧に行ったときとは別人のように変化しました。

暗い聚楽壁は白い漆喰で塗り替え、部屋が明るくなりました（写真6）。

ふすまはボロボロでしたが、すべて剥がして洗い、張り替えました。ふすまの中

写真６　漆喰を塗りはじめるところ　全員初心者
photo by Yuya Miki

には戦前と思われる紙が利用されていたので、代わりにその日の〈浅田真央さん引退〉の新聞記事を忍ばせました。半世紀後へのタイムカプセルです（写真7）。

写真７　襖の張り替え後、引き手を打ち込む。汚れるところはあらかじめカラフルな紙で補強

障子は、同居人の一人の日本画家が「初めてするよ」といいながらも、あっという間にきれいに張り替えてくれました。

古いタンスは、3段をバラバラにして、BRIWAX（ブライワックス）という環境配慮型の色つきワックスで磨いたらとても素敵になりました。

補修作業の多くは、YouTubeで動画を何度も見てプロの手業や手順を真似しました。

私が一番驚いたことは、70年の埃とネズミの糞が積もりに積もった真っ黒の天井板の再生です。写真8のように、真っ黒で触れるのもためらう天井板でしたが、タンクに貯めた雨水を使って高圧洗浄したところ、見違える材に生まれ変わりました（写真9）。この元天井板は、押し入れの壁に入れた羊毛断熱を覆うのに使いました。新しい材を買わずに、また古い材を燃やさずに、すてきな押し入れが完成したことは、言葉にならいない感激でした（写真10）。

写真８　真っ黒の天井板　天井裏側

写真９　高圧洗浄で研磨すると、表面が薄く削れて木目が出てくる。いくらでも磨けるのでキリがない

写真 10　キレイになった元天井板を断熱後の押し入れの壁に使う

4 時間を暮らしに保存する

同居人の一人は「時間を暮らしに保存する」といって、ベンチを作ったり、壁を直したりしていました。私たちの人生は、当たり前なことに時間がどんどん過ぎていきます。お金でベンチを買うことはできるのですが、そのお金は、大抵自分の時間を使って稼いだものです。時間は消費するものと思われがちですが、自分の時間を使って、自分の暮らしに必要なモノを作ったり直したりすると、そのモノに自分の時間が保存されるというのです。その作ったり直したりしたモノを暮らしの中で使うとき、なんともいえない幸福感があります。この家から出てきた大量のモノのうち、処分したモノも多くありますが、修繕したり、きれいに磨いたりして使わせてもらっているモノもたくさんあります。中でも、みんなでとりかかった修繕プロジェクトは洗い工場だったスペースです。

5 過去に人が集う家だったところを現代の形で再び人が集う場に

もともとこの家は、地域の会長をしている方のお宅だったようで、地域の資料や京都ならではの行事の資料などがたくさん残っていました。

テレビが入ったのもこの地域で初めてだったようで、地域の回覧板でテレビを引くための工事の案内と「観に来てください」と声を掛けてらっしゃったことも知りました。ご近所の方と話していても「うちのお父さんは、毎日のようにこのお宅へ晩酌に行っていたのよ」と聞きます。人が集う家だったことは、座布団の数や湯飲みの数をみてもわかります。20人以上の会合を開けるよう整えられていました。そうであるならば、現代でも似たような役割をこの家に機能させられないかと考え、皆で工場に手を入れました。最初に家の中のモノをすべて出したあの工場スペースです。壁を貼り、床を整え、座るところができると、いよいよ人を迎えられる雰囲気になりました。

Sunday Mibrunch Bazaar（サンデイ ミブランチ バザール）というバザールを隔月の日曜日ブランチタイムに開催しています。地名の壬生とブランチを掛けてMibrunchとしました。初回のサンデイ ミブランチ バザールの日、地域の高齢の方や子どもたち、若者、家族連れ、外国の方など多様な人が大勢賑わう工場を見ているときに、何度か地面から頭のほうに向かって身震いのようなものがありました。私は「これが、場所が喜んでいるということなんだ！」とすぐにわかりました。初めての経験でした。

写真 11　モノが山積みされていた工場のリペア後　サンデイ ミブランチ バザールの日

写真 12　エコ生活を実際に見てもらい、実践者と直接話してもらうことは取り組みへのハードルが下がるのでは？と思って紹介している。写真は、窓断熱について話した日に、自作の内窓を見せているところ

6 終わりのない修理修繕作業とシェア

今日は、麻の大きな蚊帳を近所の小さなクリーニング店に出してきました。もちろん、この蚊帳の元の持ち主をよく知っているクリーニング店です。家のことを聞く楽しみもあります。きれいになった蚊帳が返ってきたら、わが家で毎月開催している「月に一度の手芸サークル＜ボロチク＞」の時間に修繕しようと思っています。自分ひとりで作業をするのは億劫なのですが、みんながそれぞれ持ち寄ったものをチクチクする時間に蚊帳の修繕をするのは楽しみです。そして、自分で直した蚊帳で夏の暑い日に寝るのが楽しみです。寝ながら蚊帳を見上げたときに、自分の時間がそこに保存されていると実感できるのを知っているからです。

うちには12人の人がいますが、誰もテレビをもっていません。電子レンジは1台だけ。それでも十分です。私がもっているプロジェクタと誰かがもっているスクリーンを併せれば、みんなで上映会もできます。

最近みんなで観た「人生フルーツ」というドキュメンタリー映画に「時をためるくらし」という表現が出てきました。私たちと似たことを考えている先人がいる！と嬉しくなりました。

時間は消費するものではなく、自分の暮らしにためる（保存する）ことができます。でも、一人ではなかなかはかどりません。周りに人がいるとはかどり、またそれが多様な人だとモノは循環します。実家のモノの整理を家族だけですると、要らないモノはみんな要らない、欲しいものは私も欲しいということが起きますが、そこに留学生一家が見に来たり、レトロなモノを探す若いアーティストがいればどんどんモノは減ります。一番手っ取り早いのは、家の前に「どうぞご自由に。Take Free」と書いて不要なモノを置いておくことです。ものの見事になくなりますよ。一度お試しください。

7 おわりに

私たちの住むこの家もあと10年放置されていたら、家がまるごとごみになっていたかもしれません。1年前の私だったら、それはもう仕方のないことだと思っていたと思います。幸い仲間が常に少し先のイメージを共有してくれて、なんとかここまでついてくることができました。今では、ストックごみで満タンの古い木造の家を見ると、希望にしかみえません。私たちには創意工夫という手段があります。